

板橋演劇センターのシェイクスピア全作品上演達成

佐々木 隆

プロローグ

二〇一六年四月二十三日、シェイクスピア没後四百年の記念すべき日に板橋演劇センターがシェイクスピア三十七作品の上演を達成した。この日の演目は『ヘンリー八世』であった。全作品上演を達成する演目が『ヘンリー八世』でしかもシェイクスピアの命日であるとは記念尽くの日となった。上演後に板橋区立板橋文化会館小ホールロビーで板橋演劇センター・主宰者の遠藤栄蔵の進行のもと、翻訳者の小田島雄志の挨拶があった。小田島は出演者へのねぎらいの言葉を掛け、これに加えて、板橋演劇センターの活動を支えた板橋区への感謝が込められていた。その後、公益財団法人板橋区・国際交流財団事務局長・帯刀繁がこの記念すべき全作品上演達成の乾杯を宣言して祝杯となった。

一 全作品上演・全作品朗読

日本でシェイクスピア全作品を初めて達成したのは出口典雄演出・小田島雄志訳によるシェイクスピア・シアターである。一九七五年にジーパン・シェイクスピアと言われるところか始まり、最終的には一九八一年に小田島雄志による個人訳による『シェイクスピア全集』の翻訳も同時に達成された。二〇〇〇年から二〇一〇年にかけてひとり芝居としてシェイクスピア全作品上演を果たしたのは楠美津香である。上演ではないが、一九八七年から一九九二年にかけて荒井良雄は朗読シェイクスピア全集を達成している。

プロの劇団、ひとり芝居、朗読による全シェイクスピア作品のパフォーマンスを達成している。ここと言う全作品とは基本的には三十七作品を指している。シェイクスピア・シアターでは小田島雄志が坪内逍遙以来全作品の翻訳を個人で進めたもので、出

口典雄はシェイクスピア全作品の演出を果たしたことになる。荒井良雄の朗読シェイクスピア全集では日本語・英語の朗読、『血縁の二紳士』『ソネット集』詩編を含めた全作品朗読となっている。楠美津香はひとり芝居のため、基本的には構成・演出・出演を一人でこなしていることになる。その上演スタイルも講談風と評されている。

二 板橋演劇センター

板橋演劇センターの設立経緯については同センターのホームページに掲載されているので、抜粋で紹介しておく。

板橋演劇センターは、日本におけるリージョナリーシアター(非営利の地域専門演劇団体)を指し、一九八〇年に旗揚げ。板橋区立文化会館を中心に公演活動を行っております。レポート

リーは、シェイクスピア作品を中心に、親子で楽しめる「ファミリー劇場」|| オリジナルミュージカル、日本や世界のドラマ(ストリートプレイ)などと幅広く上演活動を行ってまいりました。

板橋演劇センターは荒井良雄他編『シェイクスピア大事典』(日本図書センター、二〇〇二)でも取り上げられているので、その箇所を紹介しておきたい。

シェイクスピア劇上演という観点から劇団を見ると、鈴木メソッドを生み出した鈴木忠志主宰のSCOT、全作品上演のシェイクスピア・シアター、安西徹雄主宰の円、雲・樺を合併統合した昴、リージョナル・シアターを目指す遠藤栄蔵主宰の板橋演劇センターの活躍は、その独自性と上演の回数からいっても見逃せない存

在である。(六五八頁)

板橋演劇センターは一九八〇年(昭和五五)の『夏の夜の夢』(小田島雄志訳、遠藤栄蔵演出、板橋区民館公会堂)で旗上げ公演、現在まで毎年シェイクスピア劇上演を続けているだけでなく、リージョナル・シアターとして地域と密着した活動はシェイクスピアをさらに身近なものとしている。(六五八〜六五九頁)

板橋演劇センターはプロの劇団として活動しているわけではない。板橋区の住民を中心に、主宰者であり演出家でもある遠藤栄蔵指導のもと、世代交代を続けながら、区民を中心にして作りあげたまさに庶民のためのシェイクスピアである。その板橋演劇センターが全作品の上演を達成したことはまさに快挙と言っている。

主宰者・遠藤は青年劇場で演劇を学んできた。遠藤演出の基本は小田島雄志訳を徹底的に読み込み、そこからどのような解釈ができるかということ、場面や台詞の省略はあっても、翻案するようなことはなく、シェイクスピアの台詞を中心に構成されている上演スタイルである。

三 板橋演劇センターと私

私が初めて板橋演劇センターのシェイクスピア劇を観たのは一九八八年九月の『オセロー』からである。以降、すべての上演を見ていたわけではないが、三十年近く上演を見ている。私にとって板橋演劇センターには特別な思いがある。

シェイクスピア劇の観劇は大学院修士課程に入學した一九八二年四月より本格的にはじめた。その後一九八七年三月に駒澤大学大学院の博士後期課程を満期退学したが、シェイクスピア劇を観たあと、演

出家の人と話をしてみたいと思い、劇団の人に声をかけ、演出家の遠藤氏がきさくに飲みに行きましようと誘ってくれたことから始まった。演出上のことなど観ていた時に疑問に思ったことを素直にぶつけてみたのだが、私が思っていた通りのこともあれば、全く異なることもあった。さらに役者も同席していたため、若手の研究者の疑問は作り手と観客の感じ方の違いが浮き彫りにされ、お互いにとって有益な時間となった。私自身もまだ二十代の後半と年齢も若かったこともあるが、以降は、大きな劇団ではなく、小さな劇団の上演を観た時には時間があれば関係者と話をすることがたびたびあった。

後年、遠藤氏にいろいろと聞いたところ、観劇のあと話をしたいと言って来たシェイクスピア学者はあなたが初めてで、以降は時間があれば、宴席で演劇談議があった。当時あちこちでシェイクスピア劇を観ていて同じ演目を複数本観ていることから演出

の違いなどに注目していたこともあり、遠藤氏は興味深く聞いていた。私としてみれば、演出家に直接疑問を投げ掛け、その疑問に答えてくれる私にとつては貴重な存在となった。以来、あちこちの劇団のものを含めると、かなりのシェイクスピア劇上演を観ることとなった。私自身のシェイクスピア作品に対する捉え方も、いわゆるテキスト研究というよりは、上演した時にどうなるのかといった上演論的な見方をするものが多くなった。

四 遠藤栄蔵のシェイクスピア

シェイクスピア全三十七作品の演出を果たした遠藤栄蔵は、個人的にソネット集を朗読で読む会を開催し、三十七作品の演出、さらには出演も果たし、小田島雄志が翻訳したシェイクスピア作品すべてのパフォーマンスも達成したことになる。

エピローグ

三十七作品の上演を達成した快挙を当日『ヘンリー八世』に出演していた若い役者たちはあまりわかつていないようだった。しかし、だからこそリージョナルシアターが三十七年もかけてシェイクスピア三十七作品の上演が可能となったような気がする。余り力み過ぎなかったからこそ、なしてやることなのかもしれない。しかし、主宰者の遠藤は「三十七作品をすべて上演したい」という気持ちだが、確実にできるとなった時、どのような思いであったであろうか。この快挙の瞬間に立ち会えたことを私自身も忘れずに今回、ここに記したい。

参考資料

「板橋演劇センター」

(<http://itabashie.web.fc2.com/>)(二〇一六年五

月四日アクセス)

*本稿執筆中にシェイクスピア劇全作品上演を目指している彩の国シェイクスピアシリーズを一九九八年から開始した蜷川幸雄が二〇一六年五月一二日に八十歳で亡くなった報道が流れた。シェイクスピア没後四百年の年に亡くなったのも何かの縁であろうか。